

衣料品いりょうひんを扱う会社たで絶えず上司しっせきに叱責され、家に帰れば妻子にいたぶられる。昭和こうきの後期に人気はくを博したギャグ漫画『ダメおやじ』の主人公、雨野だめ助である。

連載中れんざい、気の毒どくに思ったファンから激励げきれいの手紙が出版社に届いた。当方とうほうはまだ小学生だったが、仲間と毎週まんがし、漫画誌を回し読みしたことを覚えている。

作者ふるたにの古谷三敏みつとしさんが85歳で亡くなった。共著きょうちよ『ボクの満洲漫画家たちの敗戦体験はいせん』などを読むと、子供時代を奉天ほうてん(今の瀋陽しんよう)や北京で過ごしている。敗色はいしよくが濃くなると、「敵兵が来たら、これで殺せ」と父親から手榴弾しゅうりゅうだんの使い方を教えられる。中の良い同年代の中国人もいたが、大人の影響か、見下ろす感覚は隠せなかったという。

引き揚げてからは「満洲、満洲」といじめられる。後ろめたさはぬぐえず、戦後も長く大陸中国を旅することができなかった。代わりに訪れた台湾で、街中くずの崩れたレンガを見た瞬間、北京での暮らしよみがえが蘇り、感極かんきわまったという。

一方で、万事ばんじおおらかだった大陸での生活は、漫画家としての仕事にも影響した。「漫画の締め切りも怖くない。親子三人の暮らしが切羽詰せつぱつまっても絶望ぜつぼうしない。どこか平気なんです」。言われてみれば、ダメ助もどんな窮地きゅうちに陥ろうと、どこか泰然たいぜんとしていた。

そんなダメ助の運命は後半に突如とつじょ、上向く。ついには財閥令嬢ざいばつ れいじょうに気に入られ社長しやうにんに就任する。波乱万丈の大陸暮らしで培われた楽観主義はらん ばんじょうが、作風さくふうでも生き方でも大輪たいりんの花を咲かせた。